

肺がん検診における偽陽性結果が次回検診受診行動に及ぼす影響
The Effect of False-Positive Results on Subsequent Participation
in Chest X-ray Screening for Lung Cancer

佐藤亮^{1,2,3}, 浜田将太¹, 浦島有希², 田中司朗¹, 岡本浩明^{2,3}, 川上浩司¹

¹ 京都大学大学院医学研究科 薬剤疫学分野

² 横浜市立市民病院 がんセンター

³ 横浜市立市民病院 呼吸器内科

背景:

検診から効果を得るためには、継続的かつ高い参加率が重要である。本研究の目的は、肺がん胸部 X 線検診の初回受診者を対象として、偽陽性結果が次回検診参加に与える影響を検討することである。

方法:

2007年4月から2011年3月までの間に横浜市の肺がん検診を初めて受診した人を対象とし、ヒストリカルコホート研究を行った。追跡期間は2013年3月までとした。初回検診から365日（プライマリーアウトカム）から730日までの検診受診割合について、初回検診での陰性者と偽陽性者とで比較した。一般化線形回帰モデルを用い、参加者と検診内容の特性で調整し、検診結果と次回参加についての関連を評価した。

結果:

解析対象は、偽陽性者 3,132 人、陰性者 15,737 人であった。次回検診受診者（365 日以内）の割合は偽陽性者で 12.9%、陰性者で 6.7%であり、次回検診受診までの期間を延長しても偽陽性者の参加割合は高かった ($P < 0.01$)。次回検診参加についての予測因子は、偽陽性結果（リスク比 1.72; 95%信頼区間 1.54-1.92）、高齢（1.17; 1.11-1.23）、男性（1.46; 1.29-1.64）、現喫煙者（0.80; 0.69-0.93）、有職者（0.79; 0.70-0.90）、がん検診センターでの受診（vs 福祉保健センター; 1.36; 1.15-1.60）であった。

結論

本研究により、肺がん検診で偽陽性結果を受けた参加者は、陰性結果を受けた参加者と比較して、次回検診を受診しやすい傾向があることが示された。